

最後のアサパン

—ウガンダ国イテソ民族の成人式—

長 島 信 弘*

The Last ASAPAN
The Initiation Ritual among the Iteso of Uganda

Nobuhiro NAGASHIMA*

I 序

私は1968年9月から1970年8月まで、ウガンダ国中東部に住むイテソ民族（Iteso, 表記上テソ The Teso とされた時期がある）の間に社会人類学のフィールドワークを行った。目的は古典的民族誌の作成、すなわち社会、文化、歴史の総合的研究だった。その中で、是非知りたいと考えていたのは「年齢組織」とその持続を保証するアサパンと呼ばれる成人式のことだった。文献では1950年代半ばまでは行われていた形跡がある。ライト（Wright）、ガリヴァー（Gulliver）、ローランス（Lawrance）らの記述はいずれも聞き書きによるもので、イテソのアサパンの実見記録は存在しなかった。

広大なイテソの土地の中から私が調査地として選んだのはテソ・ディストリクトの北東部にあるウスク・カウンティーの中のウスク・サブカウンティーだった。この地域には年齢組織が存続している可能性があり、ことによるとアサパンも行われるかもしれないと推測していたからである（私は英国で2年間イテソを含む同系諸民族の文献研究を行っていた）。

ウスクに入ると年齢組織は存続していることが分かった。しかしアサパンは10年以上行われていないようで、そのため新規加入者が無く、年齢組織自体いずれ消滅する運命にあった。

「アサパンがありそうだ」という噂を聞いたのは1969年12月も半ば過ぎのことだった。しかし、どこでいつ行われるのかは分からなかった。クリスマスだろうと友人たちは推測した。当時アフリカ研究の大先達山口昌男さんがエチオピアからの帰途私のところに滞在した。12月22日私は隣家で行われていた「子供を抱く」という女性儀礼を見に行った。妻方来訪者の一人ビ

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

ーター・ケディという人物が、彼の一族でアサパンをやるから私も「成人」するようにと勧めてくれた。私は欣喜雀躍、天にも昇る心地と決まり文句で喜んだ。

ところが困った事態が発生した。山口さんが25日に首都カンバラに帰りたいと言う。「二日待って下さいよ」とお願いしたのだけれど、山口さんにも都合があつて、変えられないとのことだった。これには悩んだ。イテソの年齢組織を解明するためにも、おそらく最後となるだろうと思われるアサパンを記録するためにも、参加したかった。60キロ離れたソロティの町まで交通手段は私のオンボロ車、ルノー・ローホー（750cc）しかなかった。ソロティからカンバラまでのバスの乗り継ぎ旅行は「初心者」には無理と思えた。それに、アミン軍司令官によるクーデターもいつ起こるか分からないという噂だった。「送りましょう」と私は言った。

とんぼ返りで26日に儀礼の場についた時は午後4時を過ぎていた。儀礼は25日の午後には始まったという。私は直ちに成人する一人として儀礼の最後の段階に加わった。翌日から私の見られなかった儀礼過程を主催者や参加者たちから聞く作業を始めた。特に、ピーター・ケディ氏から詳しい話を聞いた。しかし、儀礼を聞き書きで再構成する作業は万全を期しがたいものである。

この儀礼と、それを行う年齢組織については、私は日本語ではごく短い紹介しかしていない（1972a pp49-57）。年齢組織についての英文報告でもアサパン儀礼は要約記述にとどまっている（1998 pp227-248）。この小論では、アサパン儀礼過程の再構成を主眼とし、年齢組織については概要にとどめる。

Ⅱ ウスク・イテソの年齢組織（概要）

20世紀初頭まで、イテソ民族には地域によって二つの異なった年齢組織が存在していたようである（Nagashima 1998）。その一つアサパン・システムは同系の他の民族でさまざまな形態で発達していた。ここではウスク・サブカウンティーに残っていた年齢組織の概要を記す。この地域の住民は2-4世代前（19c 半ば？）に東のカラモジャ地方から移住してきたという伝承があり、実際祖父、曾祖父の出生地を聞くと殆どがカラモジャである。この大規模移住の原因はガカリモジョン民族の大襲撃によったものらしく、カリモジョン側により詳しい口頭伝承が記録されている。

年齢組織は「世代組」と「儀礼集団」という二つの交錯した組織原理から成っている。成人と死と社会危機に関わる儀礼を執行するのがその主な機能で、昔も軍事機能はなかったようである。

1 世代組アサパヌ *Asapanu*

世代組は動物名で知られ、父と息子は同じ世代組には入れなかった。北ウスクで私の記録した世代組の名は南ウスクで記録されたものとは異なっている。北ウスクに関する限り、名前と順序は一致していた。

北ウスク（長島）		南ウスク	
ゾウ	Itomei	ゾウ	
ライオン	Ingatunyo	キリン	Ekorio
ヒョウ	Irisai	イボイノシシ	
シマウマ	Itukoi	ライオン	
イボイノシシ	Iputiro	ヒョウ	

「未成人」は イクリチャック Ikulicakとよばれる。

私の参加したアサパンはシマウマ世代組を開くものだった。私が会った老人たちの中でライオンは二人だけであとは皆ヒョウだった。

2 儀礼集団エテム *Etem* と下位集団アイリゲット *Airriget*

儀礼集団エテムというのは、年齢組織の執行する儀礼を名目上主催する単位集団で、北ウスクには8集団が存在した。エテムは「男の火」とも言われ（料理に用いる「女の火」と区別される）、屋外の焚き火の周りに男たちが集まる場所を原義とする（朝夕は涼しい地域である）。

実際に儀礼執行の中心となるのはエテムの下位集団でアイリゲット（円陣）と呼ばれるものである。例えば、世代組の一人が死ぬと、死者の属するアイリゲットが葬儀と喪明けの儀礼を主催し、同じエテムの他のアイリゲットの成員は参加はするが、円陣に入らず、供犠された牛の肉にも権利はない。

3 成人の権利

アサパン儀礼を経て成人した者には以下の権利が与えられる。

- 1) アサパン名（牡牛名）を与えられ、名乗れる。
- 2) 結婚できる。
- 3) 槍と小さな携行用の床几を持つことが出来る。
- 4) 同一儀礼下位集団の成員の死者儀礼において円陣アイリゲットに参加できる。
- 5) 年齢組織の主催する儀礼に何らかの形式で参加できる。

Ⅲ アサパン儀礼の記録（1969年12月25-26日）

1 動機

ケディ氏によると、このアサパンを最初にやろうと言い出したのはオコリトック・パリッシュのアテライ村に住むセルシ・オグワニ氏だった。彼は、ずっとアサパン儀礼が行われていなかったで、「成人」が減ってきたことを憂慮していたという。成人がいないとアプニャとよばれる「喪明け儀礼」の開催が困難になるし、なによりも、良き慣習が失われることになるという理由を強調したそうである。彼の年齢集団（エテム）の成員たちもこれに同意し、準備が始められた。将来アサパンを行う機会は少ないだろうという判断で、一族の5歳の子供からから20代後半の青年まで16人が成人することになったという。

この中には3組の父・息子が含まれていた。伝統的にはあり得ないことだが緊急避難の措置だったという。

2 儀礼過程

[以下の儀礼過程の記述において「場面」にA1, A2...「個別的な儀礼行為」にR1, R2...という記号を付す。]

第1日 1969年12月25日（聞き書きによる）

A 1 聖林訪問

R 1 集合 成人式を受ける若者たち（単数：アサパナック *asapanak*、以後「青年」と書く）は、午後集まった（集合場所、服装不明；おそらくチョダ氏の住居、普段着）。

R 2 聖林へ 青年たちは長老に先導されて村から2キロほど離れたところにある、自分たちイカンガエダ儀礼集団の聖林（*atuket*）を訪問した。（そこでどのように過ごしたかは不明；聞き逃した）。

[R 1, R 2の儀礼行動については不明]

R 3 帰還 青年たちは長老の一人オディド氏（*Odido*）を先頭に行列で歌を歌いながら村に帰ってきた。最初の歌は *Ageigei toto liletio*（母の望みをかなえよう？）で、そのあといくつもの歌を歌った。一同はまずモリレム氏（*Morilemu*）の住居囲いに入った。そこにはすでにオタピ氏が一頭の去勢牛をつれてきていた。この去勢牛は「先導者」*engarenon* と呼ばれた。行列の先頭に立ったオディド氏もそう呼ばれていた。日は暮れかかっていた。

「長老」とはこの儀礼の執行者であるヒョウ組の大人たちのことをいう。

A 2 変身（少年から女性へ）

R 4 着衣 青年たちは囲いの中の庭で半ズボンの上に女性用の腰布を巻き、裸の上半身の両肩から二本のビーズ紐を袈裟掛けにし、伝統的な鉄の腕輪をはめた。これらは長老たち

が用意した物である。

R 5 牛糞を塗る 門の外にはモリレム氏が、新鮮な（「良い」）牛糞を入れた、半分に分けたひょうたんを持って立っていて、出てくる青年一人一人の顔、膝、身体の露出部分全体に牛糞を塗った（*aijuku asike*）。

[牛糞は後に述べる犠牲牛の胃の中の半消化の草エクジット（「冷やす物」すなわち「危険を防ぐ物」として儀礼で用いられる）の格下の類似物として用いられたのであろう。他の儀礼で牛糞が人の身体に塗られた例は知らない。]

オタピ氏を先頭にした行列は、儀礼の父チョダ氏（Coda）の住居囲いに着いた。オグワリ氏は牛糞入りのひょうたんを持って、門の外に立ち青年たちに牛糞を塗った。

R 6 沈黙 門を入ると正面に焚き火が作られていた。儀礼の母とよばれたチョダ夫人のクノは、この場所をエテム・ロイピエラ *Etem loipiera* 「暖をとる火の場所」と言う。「エテム」は「儀礼集団」をも意味する。青年たちはこの火の周りに静かに座った。「沈黙」厳守が宣言された。この時にシャツは着てはならないとのことだった。

槍を持った長老たちが次々とやってきた。「母」クノさんは一人一人から槍を受け取り、それを青年たちの寝る小屋の扉の右前穂先を下にして立てた。

（この長老たちのその後の言動については記録がない）。

R 7 寝小屋 青年たちは小屋に案内され、そこで「母」は自分の醸造したビールを出した。（「ビール」はシコクヒエとカッサヴァの粉を醸造して作る。儀礼の必需品）

第2日 1969年12月26日

A 3 労働

R 8 牛牧 夜明けとともに長老オデイド氏が青年たちを連れて「父」の牛囲いに行く。彼らは槍とアパリコ（黒いエパリスと呼ばれる木の枝：辞書にある学名 *grewia mollis*）を手を持っていた。一行は牛群を連れて3時間ほど放牧（*acok akituk*）して過ごした。この間五つの歌を歌った。

R 9 薪拾い 放牧から帰ると今度は近くの沼地へ行き、そこで薪を集めた（女性の仕事）。帰途歌った歌の文句；‘*eyangaar akito ore kapapa*’（父の家へ木を持っていこう）。

A 4 命名

R 10 料理イデキア 「母」はこの間イデキア（単 *edeki* 複 *idekia*）とよばれる料理を用意していた。

[これは、豆 *imale* と落花生を挽き、調味料アバラン *abalang*（7種の草を焼きそれを通した水；「塩」と訳される）を加えて煮た料理。]

彼女はそれをひょうたんの器に盛って中庭の中央に置いた。青年たちはその周りに座った。

「彼らは赤ん坊と同じ」というコメントを後に聞いた。]

R11 命名 「父」オグワニ氏は中央に立って、「成人名」(アサパン名)を呼び上げていった。ある名前が気に入った青年は中央に進み出て座り、指で料理を掬い取って食べた。これにより、その名はその青年のものとなった。[名前のレストランは作成していない]。

A 5 聖林往復

R12 イヤレの方角へ 青年たちは長老に率いられて行列を成し、「イヤレの方角に」ある長老の住居に向かい、その門の前で立ち止まった。しかし中には入らず、門の前に座った。「父」は長老たちに「雌牛か去勢牛を一頭見てこい。」と命じた。その牛がやせていると、「山羊を選んだな」と言うのだそうである。

[イヤレ *iyale* ということばには三つの関連した意味がある。第一は、3-4世代前に先祖が現在の地に移住して来たときの出発地の方角で、ここではこの意味で使われている。おおよそ南東方向である。埋葬時に死者の頭部をイヤレの方角に向ける。第二に、現在この方角に住む、イテソとは言語系統を異にするセベイ民族をイヤレと呼ぶ。これは、ウスクに住むイテソ民族の起源がセベイであったことは意味しない。第三に、イテソの中にイヤレと呼ばれる父系クランがあり、その起源はセベイ民族起源の移民であると考えられている。しかし、確証はない。]

R13 聖林往復 一行はその門のところから再び行列で集団の聖林へ向かった。
(私のノートにはこれだけしか書いてない。)

[以下の儀礼行為は儀礼の父チョダ氏の住居の中庭でおこなわれたものである。]

A 6 去勢牛の供犠

R14 長老の円陣と青年の集座 長老たちは小さな床几に座り円陣(アイリゲット)を組んだ。青年たちはその西方の地面に座った。[「西」「東」は儀礼の場で決められ、実際の方角とは必ずしも一致しない]

R15 供犠 長老のオタピ氏は連れてきた去勢牛を近くの木に繋ぎ、槍で右後肢を血のない程度に突いた *Aicod* (血が流れてはいけないとのことである)。次いで二人の槍手が選ばれ、一番槍手 *ecuman* に選ばれたオニエデ氏 *Onyede* が右側から心臓を刺し、成功した。

R16 解体 青年たちは倒れた去勢牛を円陣の中央に運んだ。この時、牛を地面に着けてはいけないという。牛は左を下にした姿勢で地面に横たえられた。アクウィ *akwi* という木の葉が牛の近くに置かれた。長老の一人が槍で腹部を正中線に沿って切り裂き、内臓を引き出して草の上に置いた。次に、皮を剥ぎ、腹部を残して解体した。

R17 内臓占い 一人の長老が、引き出された胃と腸の形態と色、全体の構成を「見た」(これは凶事占いで、これから起きうる災いの徴を探すのである。病気やカリモジョン民族の来襲の有無が探された)。

R18 長老の炙り肉の共食 円陣の西に焚き火が作られ、長老による肉を炙る作業が始まった。後肢、前肢、胃、腸、肝臓、腎臓、肺の順だった。焼けた肉は円陣の中央に持ち込まれ、これに胆汁epiuを絞ってかけた。長老たちだけがこれらの肉を食べた。

A 7 成人

R19 女装 青年たちは前日同様女性用の布を腰に巻き、ビーズの紐を2本肩から袈裟掛けに掛け、左手にアパリコの枝を持っていた。（この女装がどの場面で行われたかは不明）

R20 廻走 青年たちは円陣の中に入り、まず牛の胃袋の中から半ば消化された草 *ekijit* を右手で掬い取った。それから牛の死体の周りを反時計回りに走り廻り、その間右手に持った半消化物を互いに投げつけあった。女達が乱入し、歓声をあげて *egwon* 走り廻りながら同様に半消化物を投げ合った。青年たちと女達たちは入り乱れて走り廻ったという。円陣を組んで座っていた長老たちはこれを止めようとしたが、失敗に終わった。これが3回（3周）行われた。この、牛の胃袋の中身の投げ合いを *amaria ekijit* という。

R21 飲血 青年たちは中央に戻って、牛の腹腔に溜まっている血を掬って飲んだ。（女たちは血を飲むことを許されていない）。

R22 完了宣言 青年たちは円陣の内側に座った。

長老のチョダ氏が中央に進み出て、青年たちに「これで君たちはアサパンを完了した『*Loesapanikitos yes*』」と告げた。

A 8 混合

R23 混合着座 青年たちは乾燥した皮の敷物をそれぞれ与えられた。チョダ氏は一人一人の座り場所を指示した。円陣の床几に座っている長老の間に一人ずつ敷物を置いて座るようという指示だった。

R24 炙り肉の共食 長老たちが炙った肉を運び込み、長老と青年全員に配った。チョダ氏はまず自分で一口食べてから全員に食べるよう告げた。この共食を「胆嚢を食べる *ainyamu epiu*」という。（そう呼ぶ理由については聞いていない）。この肉は円陣外の者が食べてはならないという。

[私が到着したのはこの直後だったようである。1615とノートにある。以後の記述は私の参加・観察による。]

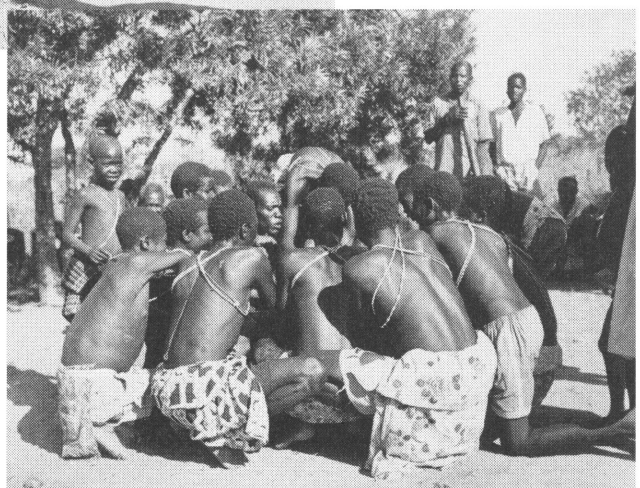
R25 長島の準備 私は直ちに上半身を裸になるように言われ、2本のビーズを掛けられた。半ズボンの上から女物の腰布をまかれ、アパリスの枝を左手に持たされた。

私のアサパン名は「オブリャンゴル *Obryangol*」と決められていた。意味は「戦い上手」、あるいは「武器使いの名手」といったものらしいが定かではない。

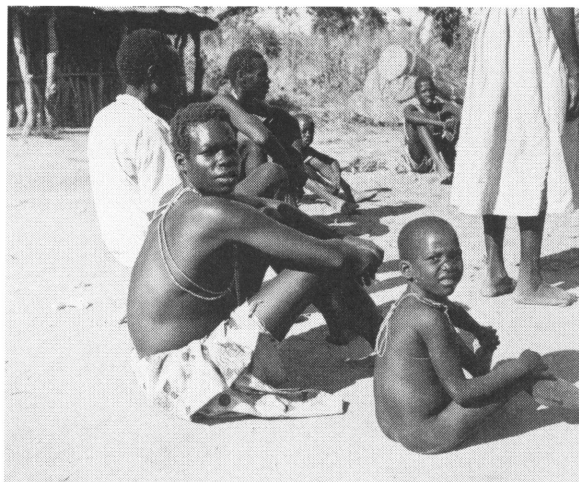
R19 廻走



R13 ビール壺

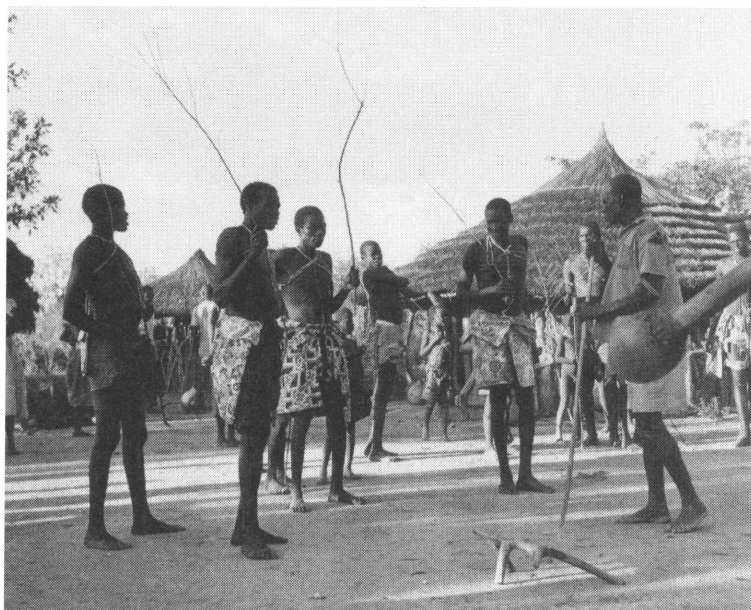


R32 ビール壺に触る



R 32-2 青年の女装

解散前の訓戒



R 26 配置 長老の円陣が組まれていた。中央に大きな土器壺があり、その北、西、南に皮の敷物が置かれていた。青年たちと女たちが円陣の外にいた。私はカメラを肩にさげノートを持って青年たちに加わった。

R 27 廻走 一同は突然走り出した。円陣の周りを反時計廻りで3回勢いよく走った。私も付いて廻った。その後直ちに円陣の中に入り、中央に置かれた敷き皮を各自一度足で踏みつけた。歌 (*ekosio*) が歌われた。女たちが右手を挙げて「ルルルルー」という独特の歓喜の叫び (*egwon*) を挙げた。再び歌になった。もう一度敷き皮の周りを走った。

A 9 同意

R 28 エムナを食べる (*ainyamu emuna*) 一同座る。妻たちがそれぞれの夫のそばに寄りそう。子どもも来てもよかったようだ。ひょうたんの器に入れたエムナが運ばれてきた。これは、落花生油と蜂蜜を混ぜた物である。匙 *akalei* が添えられていた。カーリという細い紙巻きタバコが敷物の上に置かれた。直接手渡しはしなかった。(タバコが少ないという苦情が出た。) 長老チョダ氏がエムナの入ったひょうたんを持って、中央で床几に座った。大長老のエムクニユ氏 *Emukunyu* が前に出てきて、3度両手でエムナを掬って食べた。周りから笑いが起きた。[この笑いの理由は分からなかった]

チョダ氏は一人の青年にエムナ入りのひょうたんを差し出した。青年はこれを2度拒否し、3度目に受け入れた。青年全員が同じことをした。長老たちはそれぞれ勝手にエムナを食べた。

私のフィールドノートの次の部分 R 29 は今では意味が分かり難い。推測による解釈を記しておく；

R 29 小屋を建てる 「*anya* (草) 2.2.2., *ikirioko* (植物名) *ikesi* (立てる, 差す) *luaito* (木の) *ediope* (一つ), *ediope* (同)」とノートにあり、注釈に *aibwar* (小屋を建てる→結婚する) とある。

どうやらエキリオ (単 *ekirio*, 複 *ikirioko*, 学名は *hippia adoensis* と辞書にある) という草を一本ずつ2回差して「小屋を建てる」真似をする儀礼行為があったらしい。自身参加しながら立ったままでの走り書きだから正確は期しがたい。

R 30 シマウマの歌 ここで短い歌が歌われた。

‘*Ebala etuko o,o,o, ebe aboi ai?*’ 「一頭のシマウマが言った。おーおーおー。彼はどこに座っている (住んでいる) の」

R 31 ビール壺に触る 中央のビール壺に「母」が湯を注いだ。青年たちは全員壺の周りに集まり、ひしめき合って壺に手を触れた。

R 32 ビールの口飲み 青年一人一人が呼ばれ、傾けられた壺の口から直接ビールを飲んだ。

[私の観察記録はここで終わっている。儀礼はこれでおしまいだということばを真に受けすぎた。というより、最後まで見届けるべきだと思いながらも、2日で700キロ運転した後で、いきなり激しい儀礼行動に参加したものだから、疲れ切って根気が無くなっていたのだ。この後もいろいろあったことが分かった。自分の怠慢が悔やまれる。]

以下の記述は聞き書きによる。

A10 帰還 *abwatar*

R33 肉と骨の処理 残った肉は持ち帰る。骨は燃す。

アサパンの規則；肉は犬に与えてはいけない。骨は折ってはいけない。

R34 模擬戦, *angatakin*（襲撃）長老達は槍を持って先に立ち、青年たちは棍棒を持って後続く行列で帰途についた。目的の住居に着くと、門の前で長老たちと青年たちは向かい合って戦闘態勢に入った。クオ！クオ！クオ！と叫びながら槍と棍棒が交錯し、最後に槍が勝った（青年達が退いた）。

R35 ビールの共飲 門から中にはいるときも長老が先だった。中庭には大きなビール壺が置かれ、敷き皮が用意されていた。一同はその上に座った。座るときの並び方は「父」が指示した。長老から先にビールを飲んだ。青年が続いた。

R36 廻走と敷き皮踏み 一同は反時計周りに壺の周りを走り、敷き皮を踏んだ。

（アサパンの規則；敷き皮はアサパンの日まで手で触れてはならない。）

R37 シマウマの歌 青年たちはシマウマの歌を歌った。この歌を歌うことはシマウマになることに同意したことを意味する。5つの歌がある。

第3日 1969年12月27日**A11 終了**

R38 脱衣 朝8時頃青年たちはビーズと腰布を外した。

[1-2週間後に青年の体にシマウマの模様を描く儀礼 *aiger etuko* を行う予定だと言われた。しかし行われなかった。]

以上が虫食いだらけではあるが1969年に行われたアサパン儀礼を記述的に再構成したものである。儀礼過程と儀礼行為について簡単な分析と解釈を試みることにする。

IV アサパン儀礼の初次的分析と解釈

この儀礼の目的は少年を成人させることにある。「少年」から「成人」への移行を達成するためにさまざまな儀礼行為が行われた。分析に当たって、ファン・ヘネップやV. ターナーが提唱した「儀礼の3段階」モデルを適用する。これは、かなり有力な手段ではあるが、アサパン儀礼の時系列の展開は必ずしも3段階に明確に区切れるわけではない。移行行為は反復され、積み重ねられていく。

儀礼の3段階

- 1) 分離段階（「少年：未成人」からその属性を消去していく過程）
- 2) 周縁段階（「少年」でもなく「成人」でもないどっちつかずの境界状態）
- 3) 再統合段階（「成人」として社会に復帰する過程）

分離段階としては A 1 聖林訪問と A 2 女性化, A 3 R 8（牛牧は男の仕事）から（R 9；薪拾いは女の仕事）への転換が挙げられる。アサパンに関する数少ない文献によると、青年は一ヶ月以上儀礼親の住居に住み込み、「ヒエの脱穀、薪拾い、水汲みといった労働をしながら儀礼親からいろいろなことを教わった」という（Wright p73）。この労働はいずれも女性の仕事とされている。

女装し、女性の仕事をする事、すなわち「女性化」することは、少年から男性性を消す「分離」の儀礼的手段と考えられる。（R 6）「沈黙」もまた移行の契機となっている。

A 4 命名は分離から周縁への移行措置と解釈できる。エデキアを食べるときの青年は「赤ん坊のようなものだ」というコメントを参加女性の一人が私に語った。実際、新生児の命名においても、用意された複数の名を順次呼びながらビールをつけた指を新生児の口に入れ、強く吸ったときの名が「選ばれた」としてその子に与える。アサパンで与えられる名は「牡牛名」と言われ、青年によって「選ばれる」のである。これによって、青年は「少年身分」から完全に分離される。

周縁段階に相当するのは、A 5 聖林往復、A 6 去勢牛の供犠、A 7 成人の3場面といえよう。聖林往復はA 1と同じく移行の転換点で行われるようである。

供犠の場で青年たちは地面に座っている（R14）。これは床几に座っている長老との対比において、未成人状態を表現していると考えられる。炙り肉の共食からもまだ排除されている（R 18）。

A 7 場面は複雑で、特に「廻走」行為R20は決定的な解釈を下すことはできない。暫定的推測を試みよう。まず牛の胃の内容物（エキジット）の投げ合いがある（R20）。エキジット自体は既に述べたように供犠儀礼で最も重要な意味を持つ物質である。しかし、通常は「塗る」物であって、走りながら投げつけ合うという行為は他の儀礼では私は知らない（双子儀礼ではありうるかもしれない）。

次に、女性が歓声を挙げながら乱入して青年たちと走り回る。長老はこれの制止に失敗する（R20）。青年と女性が一体化し、長老と対立・勝利すると解釈できる。

全体としては「混沌状況」、ターナーの言う「境界状況」の出現であり、まさに周縁段階の典型的行為といえそうである。

「ぐるぐる3回廻る」行為は他の儀礼でも何度か見た。その一つで教えられた説明を参考にしよう。新生児は小屋の中央で全裸で四つん這いになった母親の背に寄せられる。両側に立った二人の「姑」が新生児を3回母親の腹の下を通し背に戻す。これは母の下にある「影を切っているのだ」と説明された（長島1988, P 74）。私の解釈では、「影」とは夫方と妻方を仕切る線

である。それを新生児が切ることで姻族の融合が子供を通して成立する。他の儀礼でも「ぐるぐる3回廻り」は異なるカテゴリーの融合と解釈して不都合はない。ここでは青年と女性が融合し、青年の「男であって男でない」どっちつかずの状態が極限に達する。

融合したものは分離されなければならない。それが牛の血を青年が飲む行為である（R21）。女達は血を飲んではいけないのだ。これによって青年の「成人化」は完了する（R22）。

再統合段階A 8, 9, 10, 11の4場面は成人した青年たちが成人として日常社会に復帰する過程とみなして良いだろう。

まず青年はこの儀礼で始めて敷皮を与えられ、長老に混じって座る（R23）。しかし、長老と青年の序列は「床几に座る者」と「敷皮に座る者」という区別で維持されている。

次に、青年は炙り肉を与えられ、長老と共にこれを食べる（R24）。しかしその後で新成人は再び円陣の外に出て女たちと合流し、円陣の外を3回走り廻る。ついで円陣の中に入って敷き皮と壺の周りを走り廻って敷き皮を踏む（R27）。ここで時間は元（R20）に戻ったかのように見える。これが「移行の反復」と私が最初に述べた意味である。しかし、行為や物の詳細を見ると全くの反復でなく、最初の廻走からの違いが見て取れる。

青年はエムニヤを2度拒否し3度目にこれを受け入れる（R28）。これを青年が強制ではなく自分の意志で「成人」する表現と取るか、年齢組織という社会制度に屈服すると取るかは決定要素がない。類例では、嫁が結婚の絆から逃げて実母の小屋に閉じこもり、姑の「出ておいで」という呼びかけを2度拒否して3度目に同意する「脱穀場を清掃する」という儀礼がある（長島1972b）。

成人するということは「結婚」が視野に入ってくる事である（R29）。男女分業の著しいイテソ社会では、男の結婚願望は女性よりも強い。

成人することは、ここではシマウマになる事でもある。シマウマの歌を歌うと（R30, R37）、年齢組仲間の結びつきが強くなった気がする」と青年の一人が後に私に語った。私自身もそれを感じた。

模擬戦（R34）は世代組間の権威・服従関係の確認のように見える。類例は「嫁」儀礼に見られる（長島1988, p76）。

ビールの共飲（R35）は通常生活への復帰の最終手段として殆どの儀礼で行われる。とどめとも思える廻走についてシマウマの歌を歌い、翌朝女装を解いて（R38）成人が誕生したのである。

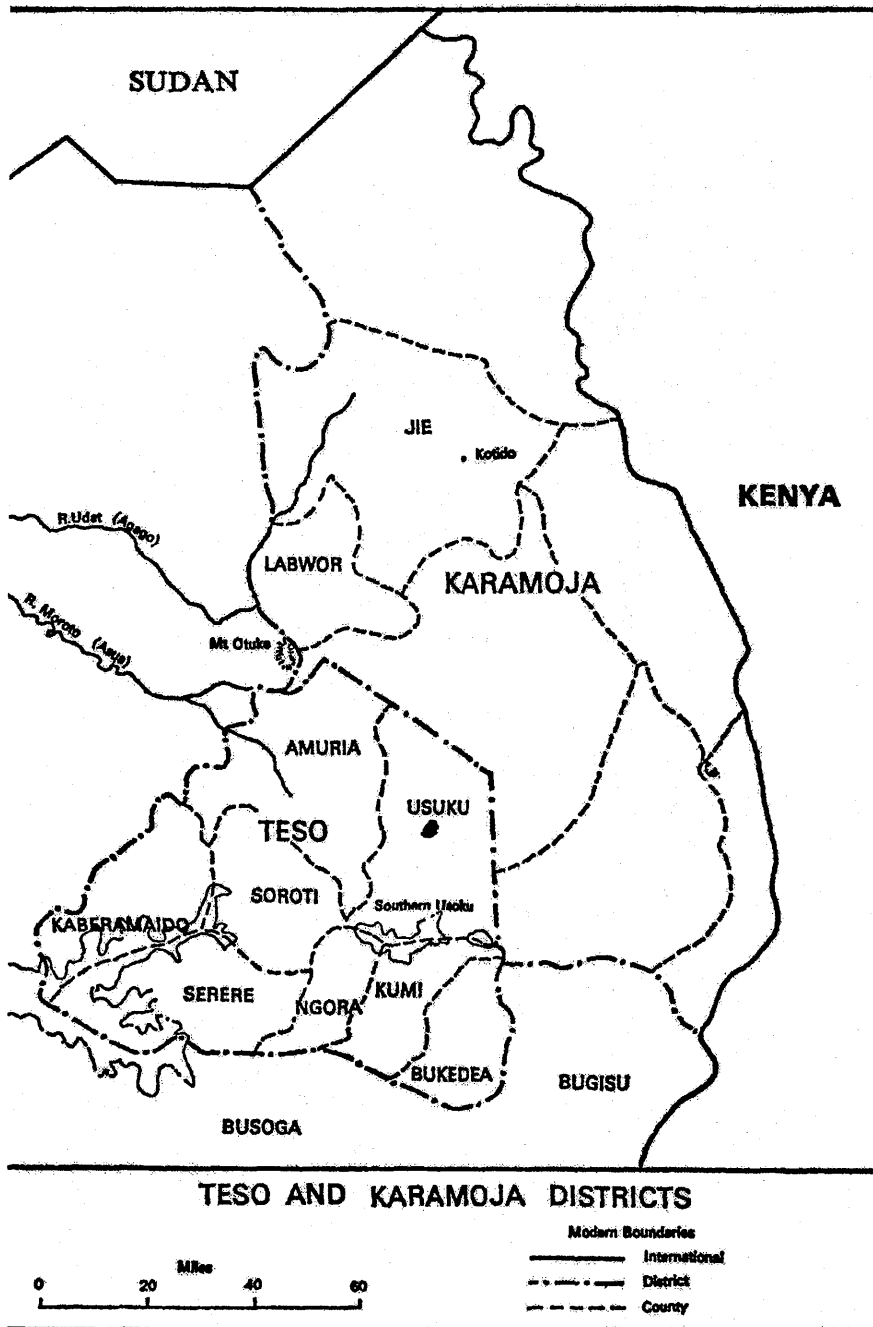
V 後記

1 イテソ文化協会（ICU）会長のオスバン氏が1999年にウスクでアサパン儀礼を再現して貰ったという。

2 1998年私はウスクを訪れた。イテソ反乱軍の拠点として政府軍に徹底的に攻撃され（1988-90）、多くの住民が逃散していた。仕立屋オケロ（故人）の家族を見つけた。やがてかなりの人々が集まって来た。だれも暗い顔で、これがあの陽気なイテソかと暗澹たる気持ちになった。顔に見覚えのある一人の老女が私の手を握って言った。「ナガシマ、皆死んじゃったよ」。アサパンを受けた青年たちのことだ。どうやら私が最後のシマウマになってしまったらしい。

参考文献

- Lawrance, J.C.D. 1957 *The Iteso* Oxford U.P.
- Nagashima, N 1998 'Two Extinct Age Systems among the Iteso' in
Kurimoto, E & S.Simone(eds) *Conflict, Age and Power in North East Africa*, James Currey, Oxford
- 1976 'Boiling and Roasting', *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 8.
- Wright, A.C.A 1942 'Notes on the Iteso Social Organization', *Uganda Journal* 9.
- ターナー V.W. 1976 (1969) 『儀礼の過程』, 富倉光雄訳, 思索社
- 長島信弘 1988 「儀礼の分化, 変形, 革新—東アフリカ, テソ族の女性儀礼」
青木保・黒田悦子編 『儀礼—文化と形式行動』, 東京大学出版会
- 1972a 『テソ民族誌』 中公新書
- 1972b 「脱穀場を清掃する儀礼」『季刊人類学』 3巻4号
- ファン・ヘネップ A. 1977 (1908) 『通過儀礼』, 綾部恒雄・裕子訳, 弘文堂



地図1 ウスクの位置

